訪日客に対する地域住民の歓迎意識に関する研究

異文化受容意識とオーバーツーリズムに着目して

A Study on Determinants of Local Residents' Acceptance of Foreign Tourist

Focusing on Inter-cultural Awareness and Over tourism

張 明軍* 包 薩日娜** 星野 敏*** 鬼塚 健一郎*** 清水 夏樹****

Mingjun ZHANG* Sarina BAO** Satoshi HOSHINO*** Kenichiro ONITSUKA***

Natsuki SHIMIZU****

Abstract :

In recent years, foreign tourists have increased in Japan. This research carried out a questionnaire survey for residents in Ine-town, Kyoto Prefecture, with focuses on the local resident's awareness, to determine factors affecting acceptance of foreign visitors and the potential impact of 'over-tourism'. As a result, "positive evaluation for inbound tourism" and "inter-cultural acceptance" directly had a positive impact on acceptance of foreign visitors. The higher the evaluation on the economic and social effects of inbound tourism is, the more foreign tourists are accepted. The more the local residents accept the foreign culture, the more favorable it is for foreign tourists and the more they are welcomed. The evaluation on 'over-tourism' has indirectly and negatively influenced the "acceptance of visitors" through "positive effects of inbound tourism" and "inter-cultural acceptance". It is necessary to consider the attributes of local residents when planning and implementing efforts to improve the local residents' acceptance of visitors and lower the negative evaluation for 'over-tourism'. This study has a significant contribution to establishment of the social system for inbound tourism in rural areas, from the viewpoint of understanding of local residents' awareness. Sustainable inbound tourism can be expected by clarifying the factors contributing to acceptance of visiting guests and potential impacts of 'over-tourism'.

Keywords: *Inbound tourism, Local residents, Welcome awareness to Foreign tourists, Inter-cultural awareness, over tourism*

キーワード：インバウンド観光，地域住民，訪日客歓迎意識，異文化受容意識，オーバーツーリズム

1. はじめに

近年，円安，ビザ緩和，所得増加，日本に対する関心の高まり等により，訪日外国人観光客（以下，訪日客）が増加し続けている。このような中，インバウンド観光がもたらす経済的，社会・文化的効果に着目し，インバウンド誘致による地域振興を図る地方が増えている。農山漁村地域では，日本ならではの伝統的な生活体験と農山漁村地域の人々との交流を楽しむ訪日客の誘致と受入が主流であり，張らは農家民宿群が構築されることによって，持続可能な訪日客の受入が定着できる¹⁾ことを示唆している。しかし，交通の便がよい都市圏及び定番の地方観光地において，訪日客の増加により，道路の渋滞や交通機関の混雑，いわゆる過剰な受け入れ（オーバ

ーツーリズム）による影響が出始め，一部の住民から苦情が寄せられている。このような都市圏及び定番の地方観光地におけるオーバーツーリズムの影響も鑑みた今後の農山漁村地域の振興の実現に向けたインバウンド観光の推進，また，特に住民意識を考慮した受け入れ態勢の構築が観光まちづくりの課題となっている。

都市農村交流活動に対する住民の評価に関する研究では，中島らが来訪者の増加によるゴミ，騒音，車による危険の増加等の問題が住民から強く指摘されていることを挙げている²⁾。宮崎らは，農山漁村地域に観光客の過剰流入が地域住民の外出を妨げる恐れがあることを示唆し，来訪者への啓発活動，交通システムの見直し等が必要であると述べている³⁾。一方，住民参加による観光まちづくりに関する研究では，白らが，住民の意見を重視

*福知山公立大学地域経営学部 **Department of Environment Science and Policy, University of California, Davis ***京都大学大学院地球環境学術 ****京都大学学際融合教育研究推進センター

*Faculty of Regional Management, The University of Fukuchiyama **Department of Environment Science and Policy, University of California, Davis ***Graduate School of Global Environmental Studies, Kyoto University ****Center for the Promotion of Interdisciplinary Education and Research, Kyoto University

する観光設備の整備が生活空間としての魅力の向上にもつながるとしている⁴⁾。

以上の既往研究から、農山漁村地域において、観光の定着と推進には、地域住民の居住環境への保護に配慮する必要がある、住民意識を重視することが重要であることがわかる。観光に対する住民意識に関する既往研究において、岩松は集落全体で訪問客を迎え入れる雰囲気を作られたことが農山村集落のグリーンツーリズムに効果的であることを示唆している⁵⁾が、白らは交流観光に対して、受入側の主体が偏ることで一般住民は消極的、排他的となり、地域社会の中の葛藤が存在していることを指摘している⁴⁾。また佐々木は、地域社会や地域住民にとって、ツーリズムのインパクトにはポジティブな面とネガティブな面が共存し、地域住民が居住地域のツーリズム開発に関して、その経済的・社会的・文化的・環境的な種々の影響を知覚し、態度を形成していると述べている⁶⁾。インバウンド観光に関しても、そのインパクトを地域住民がどう受け止めるかがインバウンド観光（訪日客）への態度を形成していると考えられる。

そこで本研究では、インバウンド観光の受入に積極的な農山漁村地域を対象に、異文化から来た訪日客に対して、ホスト側である地域住民がどのような態度（訪日客歓迎意識）を取っているかに着目し、訪日客の来訪に対する地域住民の歓迎意識の規定要因を把握するとともに、インバウンド観光の誘致によるオーバーツーリズムの潜在的な影響を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

2.1 分析の枠組

本研究では、訪日客歓迎意識の規定要因と、インバウンド観光によるオーバーツーリズムの潜在的な影響を明らかにするために、**Fig.1** のモデルを仮定した。

仮説① インバウンド観光の効果のプラス面及びマイナス面への評価が訪日客歓迎意識等に影響を与える（ $h①$ ）。佐々木および、中島ら、宮崎らの指摘を踏まえて、本研究ではインバウンド観光の効果（プラス；マイナス）への評価が地域住民の訪日観光客歓迎意識、地域愛着、生活現状満足、異文化受容意識の形成に影響を与えるか否かを検証する（ $h①-1\sim4$ ）。また、インバウンド観光マイナス影響（以降、オーバーツーリズム）への評価がインバウンド観光プラス効果への評価にも影響を与える可能性があると考えられる（ $h①-5$ ）。なお、**Fig.1** では、イ

Fig.1 訪日客歓迎意識の規定要因と観光公害の潜在的な影響の仮説モデル

Hypothesis view of the impact factors of Determinants of visitor welcome awareness and the potential impact of over tourism

ンバウンド観光プラス効果とは、訪日客の受入による経済的效果、社会的効果、文化的効果、環境的效果のことを指す。オーバーツーリズムの影響は一般的に見える現象として、騒音、渋滞、ゴミ捨て、私有地侵入、プライバシー侵害等が含まれる。そのため、オーバーツーリズムは地域愛着、生活現状満足、異文化受容に潜在的に影響を及ぼす可能性がある（ $h①-6\sim8$ ）。

仮説② 生活現状満足が訪日客歓迎意識に影響を与える（ $h②$ ）。竹橋は動機づけ的な視座に基づき、幸福感と環境配慮行動の関係性について検討を行い、環境配慮的な行動や態度は幸福感と経済的要因により調整され、ポジティブに関連することを示唆している⁷⁾。本研究では、地域住民の生活現状（経済的、精神的）に対する満足度が居住環境の変化を引き起こす訪日客に対する行動や態度に影響を及ぼすと仮定する。

仮説③ 住民の地域愛着が訪日客歓迎意識に影響を与える（ $h③$ ）。鈴木らは地域への協力的行動に及ぼす地域愛着の影響に関する研究において、地域愛着が高い人ほど、まちづくり等の活動に熱心である傾向があることを示唆している⁸⁾。地域愛着とまちづくり活動との関連性から、地域愛着が観光まちづくり活動（観光客の受け入れなど）にも影響を与えると推測し、本研究では地域愛着が訪日客への歓迎意識（観光への態度）に影響を与えるという仮説を検証する。

仮説④ 地域住民の異文化受容意識が訪日観光客歓迎意識に影響を与える（ $h④$ ）。安達は異文化受容意識を「相手の立場を尊重し、より理解に努め、双方が社会的に等しい立場に関わろうとする共感意識を持つ態度」⁹⁾と定義した。渡辺らは、日本においては居住環境の都鄙性が異文化受容態度に影響を与えていることを示唆し¹⁰⁾、塘は、子どもの年齢、異文化体験の量の多さ、環境の異文化化度の高さが児童の異文化受容態度の形成に影響を与え

ることを指摘している¹¹⁾。農山漁村地域において、日頃から、異文化との接触が少ない状況が多いと考えられる。このような環境から形成された異文化受容意識が訪日客への歓迎意識に影響を及ぼす恐れがあると推測する。なお、本研究では異文化を外国の文化であると定義する。

仮説⑤ 仮説④が成立するなら、異なる職業、異なる居住地域によって、異文化体験の量と環境の異文化度が様々であるため、地域住民の訪日客歓迎意識とオーバーツーリズムに対する評価が地域住民の属性によって、異なる可能性がある (h⑤)。

以上の仮説を検証し、訪日客歓迎意識の規定要因とオーバーツーリズムの潜在的な影響を明らかにすることで、外国人観光客と地域住民との相互理解の実現につながる誘致策とオーバーツーリズムの解消策への考察が可能となり、農山漁村地域における今後のインバウンド観光の推進に重要な意義があると考えられる。

2.2 調査方法

伊根町は京都府北部丹後半島の北端に位置し、東から北は日本海に面する (Fig.2)。2005 年に重要伝統的建造物群保存地区に選定され、「日本で最も美しい村」連合に加盟している。総人口は 2,100 人で、農業、漁業、観光業が主な産業である (2019 年 3 月時点)。伝統的建造物舟屋群という懐かしい日本の原風景を楽しむ観光客 (訪日客を含む) が急増している。伊根町の日出地区、平田地区、亀島地区に伝統的な舟群が海沿いに並び、ほとんどの観光客がこの 3 地区を訪れている。本研究はこれらの地区を観光エリアとする。他の地区 (非観光エリア) は中山間地域であり、筒川地区を中心として農地が広がり、小規模集落が点在している。

伊根町を調査対象地として選定し、2018 年 3 月 17 日から 3 月 30 日までの期間で、18 歳以上の住民を対象と

Fig.2 伊根町の地理的位置
The location of Ine-town

したアンケート調査を実施した。質問項目は Table 1 の通りである。アンケート調査は、郵送で全戸に 2 通の調査票を配布し、同封した返信用封筒に封入して、質問票を返信してもらう方法をとった。全 893 世帯の内、274 世帯、376 人の質問票が郵送により回収された (回収率は 30.7%)。

Table 1 構成概念と質問項目
Constructs and questionnaire items

構成概念	質問項目	回答
異文化受容意識	外国人と交流すると視野が広がるので良いと思う	1. 非常にそう思う 2. そう思う 3. どちらでもない 4. そう思わない 5. まったくそう思わない
	外国人とは初めは分かり合えなくても、あきらめずに分かり合えるまで努力したい	
	日本文化と同様、外国文化を尊重しなければならない	
	異なる文化を持った友人が沢山ほしい	
	外国文化を積極的に取り入れることは、日本にとってよい	
訪日客歓迎意識	外国人観光客を見かけた時に会釈や挨拶するようにする	
	困っている外国人観光客を見かけたら助けるようにする	
	外国人観光客と共に店舗や公共施設を利用しても支障を感じない	
	外国人観光客と交流するために外国語の学習を始めたい	
	なるべく外国人観光客と接触するようにする	
インバウンド観光プラス効果	外国人観光客の増加は伊根町に大きな経済効果をもたらす	
	舟屋群の復元や自然資源の保護に貢献する	
	観光振興によって、公園等の公共施設が整備される	
	外国人観光客増加による影響はない	
	地域の伝統文化 (祭や伝統行事など) の価値を再認識するきっかけとなる	
オーバーツーリズムへの評価	外国人観光客の経済効果は一部の住民に限定されている	
	外国人観光客が路上や施設内で騒ぐので、静かな生活環境が脅かされる	
	勝手に敷地や建物に立ち入り、住民のプライバシーが侵害される	
	外国人観光客と意思疎通ができないと何となく不安	
	交通渋滞、騒音や雰囲気破壊等により生活環境が悪化	
生活状況満足	現在の居住環境に満足している	
	自分の家計状況 (所得や消費生活) に満足している	
	友人関係・近所付き合いに満足している	
	地元の行事や祭りには積極的に参加したい	
	近所付き合いはできるだけしたい	
地域愛着	現在の居住地域に愛着を感じている	
	自分のまちだという感じがする	
	雰囲気や土地柄が気に入っている	
	ずっと住み続けたい (定住意向)	
	自治会や集落の活動に積極的に協力したい	

2.3 分析方法

まず、構成概念の「訪日客歓迎意識」、「異文化受容意識」、「インバウンド観光プラス効果への評価」、「オーバーツーリズムへの評価」、「地域愛着」と「生活状況満足」を表す調査データの信頼性と有効性を検討するために、SPSS Statistics 25 と SPSS Amos 25 を用いて、信頼性分析と確認的因子分析を行った。次に、仮説モデルを検証するために共分散構造分析を行った。共分散構造分析を行う際、質問項目の回答データの数値に欠損値がある場合、平均値を用いた。最後に、調査対象の年齢、性別、職業、居住地域、居住年数によるグループ分けを行い、共分散

構造分析の多母集団同時分析を行った。各対象グループにどの程度まで同じモデルが仮定できるかを検証し、グループ間で等値制約をせず、配置不変性が確認された後、パス係数の比較を行い、差異を検討した。

3. 分析結果

3.1 調査結果の概要

アンケート調査結果の概要を **Table 2** に示した。回答者の男女比率はほぼ同じであった。また、80%以上の回答者が50歳以上であった。居住年数は、回答者の63%が40年以上であることに比して、40年未満の回答者が比較的少なく、そのうち10年未満の回答者が全体の12.0%を占めていた。回答者の職業を見ると、無職（家事・定年退職者）の割合が最も高く、全体の37.5%を占めていた。観光関連産業に従事する回答者の割合は15.0%であり、回答者の住所から、非観光エリアの回答比率が観光エリアよりやや多いことがわかる。また、家族構成では、親子と夫婦、この二つのタイプの割合が高く、それぞれ30%を超えている。それに対して、一人暮らしと三世帯の回答者が比較的少ないことがわかる。

Table 2 回答者の属性
Attribute of Respondents

項目	度数	有効%	欠損値
性別	男	182	49.7
	女	184	50.3
年齢	20-39 歳	10	2.70
	30-49 歳	50	13.5
	50-69 歳	175	47.3
	70 歳以上	135	36.5
居住年数	10 年未満	44	12.0
	11-19 年	27	7.40
	20-29 年	24	6.60
	30-39 年	40	10.9
職業	40 年以上	231	63.1
	漁業	36	10.0
	製造加工業	7	1.90
	農業	52	14.4
	無職	135	37.5
	観光関連産業（宿泊等）	54	15.0
住所	その他 ¹⁾	76	21.1
	観光エリア	145	41.3
家族構成	非観光エリア	206	58.7
	一人暮らし	62	17.3
家族構成	夫婦	123	34.3
	親子	137	38.2
	三世帯	37	10.3

注：1) その他の職業は会社員、公務員、教員等である。

3.2 構成概念の信頼性分析

信頼性分析と確認的因子分析を行った結果を **Table 3** に示した。「オーバーツーリズムへの評価」は、「生活現状満足」、「地域愛着」、「訪日客歓迎意識」と有意な相関

Table 3 構成概念項目の α 係数と相関係数
Alpha coefficient and correlation coefficient of construct concept item

構成概念	α	相関	推定値	確率 P
オーバーツーリズムへの評価	0.761	→	生活現状満足	-.101 .295
		→	地域愛着	-.058 .389
		→	異文化受容意識	-.120 .031
		→	訪日客歓迎意識	.034 .457
		↔	観光プラス効果	-.162 .016
インバウンド観光プラス効果への評価	0.785	→	訪日客歓迎意識	.310 ***
		→	地域愛着	.320 ***
		→	生活現状満足	.331 ***
		→	異文化受容意識	.684 ***
生活現状満足	0.757	→	異文化受容意識	.154 .157
		→	訪日客歓迎意識	.040 .529
地域愛着	0.913	→	異文化受容意識	-.108 .377
		→	訪日客歓迎意識	-.017 .818
異文化受容意識	0.857	→	訪日客歓迎意識	.560 ***
訪日客歓迎意識	0.858			

がなかった ($p>0.05$)。また、「生活現状満足」及び「地域愛着」は「異文化受容意識」、「訪日客歓迎意識」、それぞれと有意な相関がなかった ($p>0.05$)。構成概念の α 係数は全て 0.70 以上であり、本研究で設定した変数は十分に信頼性があると考えられる。

3.3 仮説モデルの検定

共分散構造分析を行った結果を **Fig.3** に示す。各指標からこのモデルのあてはまりはよいと判断できる。**Fig.3** に示すように、「地域愛着」、「生活現状満足」、「オーバーツーリズムへの評価」から「訪日客歓迎意識」へのパスは有意に推定されなかった（点線 n.s.）。しかし、「インバウンド観光プラス効果への評価」は、「訪日客歓迎意識」、「地域愛着」、「異文化受容意識」、「生活現状満足」の4つの項目に正の影響を与え、オーバーツーリズムへの評価と負の相関関係があることが確認できた。また、「オーバーツーリズムへの評価」が「異文化受容意識」に負の影響を与え、「異文化受容意識」が「訪日客歓迎意識」に正の影響を与えていることがわかる。

$\chi^2=529.852$, 自由度=321, 有意確率=.000, GFI=.913, AGFI=.890
CFI=.961, RMSEA=.042, 標本数=376

注：適合度基準は豊田秀樹（2007）を参考にした。

Fig.3 仮説モデルの共分散構造分析結果
Covariance structure analysis results of hypothesis model

Table 4 パス係数の推定値とグループ間の有意差
Standardized path and coefficients and significant difference tests between groups

		オ→異	ブ→異	ブ→地	ブ→生	異→訪	ブ→訪	ブ↔オ
性別	男 (N=182)	-.041	.483***	.303***	.261**	.848***	.362**	-.201***
	女 (N=184)	-.176**	.471***	.265***	.425***	1.102***	.290**	.028
	有意差	-1.163	-.103	-.355	1.127	.924	-.429	3.518
	$\chi^2=953.502$ (df=642, P=.000) GFI=.853 AGFI=.814 CFI=.814 RMSEA=.037							
年齢	69歳未満 (N=235)	-.163**	.430***	.237***	.241**	1.011***	.271**	-.056
	70歳以上 (N=135)	.024	.594***	.330**	.570***	.900**	.352	-.077**
	有意差	1.507	1.191	.775	1.990	-.329	.345	-.379
	$\chi^2=954.596$ (df=642, P=.000) GFI=.855 AGFI=.816 CFI=.943 RMSEA=.037							
居住年数	10年間未満 (N=44)	.552	.946**	.400	.825**	.687**	.250	-.148
	10年間以上 (N=322)	-.099**	.418***	.264***	.290***	1.020***	.335***	-.064**
	有意差	-.913	-1.216	-.621	-1.660	1.124	.280	.902
	$\chi^2=1000.079$ (df=642, P=.000) GFI=.860 AGFI=.823 CFI=.933 RMSEA=.039							
職業	観光関連 (N=54)	-.148	.469**	.283**	.470**	.741***	.327**	-.077
	非観光関連 (N=322)	-.111**	.471***	.274***	.308***	.942***	.359***	-.068**
	有意差	-.251	-.010	.065	.783	-.791	-.187	-.124
	$\chi^2=991.635$ (df=642, P=.000) GFI=.863 AGFI=.826 CFI=.936 RMSEA=.038							
観光エリア & 職業	観光関連 (N=34)	-.141	.632**	.168	.392**	.649**	.198	-.152
	非観光関連 (N=111)	.032	.493***	.144	.203	1.154***	.206	-.164**
	有意差	0.889	-0.612	-0.154	-.848	1.413	.034	-.086
	$\chi^2=1085.046$ (df=642, P=.000) GFI=.731 AGFI=.660 CFI=.823 RMSEA=.069							
居住地域	観光エリア (N=145)	-.009	.502***	.162**	.265**	.929***	.268**	-.172**
	非観光エリア (N=206)	-.132**	.449***	.368***	.422***	1.131***	.265**	-.028
	有意差	-1.147	-.429	1.923	1.109	.675	-.015	1.909
	$\chi^2=979.630$ (df=642, P=.000) GFI=.848 AGFI=.808 CFI=.933 RMSEA=.039							

注：1) 有意差はパラメータ間の差の検定によるもので、絶対値で「1.96」以上であればパス係数の差が5%水準で有意、絶対値で「2.33」以上であれば1%水準で有意、絶対値で「2.58」以上であれば0.1%水準で有意である。

2) オ：オーバーツーリズムへの評価、ブ：インバウンド観光プラス効果への評価、異：異文化受容意識、地：地域愛着、生：生活現状満足、訪：訪日客歓迎意識。

3) *p<.05, **p<.01, ***p<.001

以上の分析から、地域住民の「訪日客歓迎意識」に「インバウンド観光プラス効果への評価」と「異文化受容意識」が直接的な正の影響を与え、「オーバーツーリズムへの評価」が「異文化受容意識」への影響を通じて、間接的に負の影響を与えていることがわかった。また、「オーバーツーリズムへの評価」は「異文化受容意識」に負の影響を与えていることから、オーバーツーリズムの潜在的な影響が明らかとなった。しかし、地域住民の職業、居住地域、居住年数、年齢等の属性によって、「訪日客歓迎意識」と「オーバーツーリズムへの評価」の規定要因は異なる可能性があり、更に、**Fig.3**の仮説モデルについて属性別の差を核にするために、多母集団同時分析を行う必要がある。

3.4 多母集団同時分析

多母集団の同時分析を行った結果を **Table 4** に示す。

男女別の分析結果からは、「インバウンド観光プラス効果への評価」と「オーバーツーリズムへの評価」の間の

パス係数に有意差が見られた（灰色の部分）。

年齢別では、2019年2月の総務省統計局のデータに基づき、20歳～69歳までを労働力の中核を担っている年齢層と見なし、69歳以下と70歳以上の二つのグループに分けて分析した。「インバウンド観光プラス効果への評価」と「生活現状満足度」へのパス係数に有意差が見られた（灰色の部分）。

居住年数に関しては、短期居住と中長期居住の差を比較するため、10年以下を短期居住、10年以上を中長期居住として分析した。また、伊根町では、観光関連産業と農業、漁業等の職業、無職が主に占めているため、観光関連産業（観光職）と非観光関連産業（非観光職）の2つのグループに分けて分析した。さらに訪日客と接触する機会は一般的に観光地周辺の住民の方が多いため、観光エリアと非観光エリアに分けて分析した。しかし、居住年数、職業、居住地域のグループ間では、有意な差が見られなかった。

また、観光エリアにおいて、観光関連産業と非観光関

連産業に従事する住民の意識をグループ別に分け両グループの差を分析したところ、有意な差は確認できなかった。さらに、「オーバーツーリズムへの評価」から「異文化受容意識」へのパス係数、「インバウンド観光プラス効果への評価」から「地域愛着」へのパス係数、「オーバーツーリズムへの評価」から「訪日客歓迎意識」へのパス係数が両グループでいずれも有意ではなかった。そのため、パスを削除して改めて多母集団同時分析を行った。分析結果を Table 5 に示す。

Table 5 の分析結果より、観光エリアにおいて、観光関連産業と非観光関連産業別では、「異文化受容意識」から「訪日客歓迎意識」へのパス係数に有意差が見られた(灰色の部分)。つまり、観光関連産業従事者は非観光関連産業従事者と比較して、異文化受容意識が高ければ高いほど、訪日客歓迎意識が高いと考えられる。

Table 5 パス係数の推定値とグループ間の有意差
Standardized path and coefficients and significant difference tests between groups

		ブ→異	異→訪	ブ→訪	ブ↔オ
観光 エリア	観光関連 (N=34)	.597***	.287*	.433*	-.152
	非観光関連 (N=111)	.431***	1.211***	.219	-.170*
	有意差	-.908	2.980	-.951	-.129
	$\chi^2=1046$ (df=638, P=.000) GFI=0.737 AGFI=0.666 CFI=0.837 RMSEA=0.067				

注：1) 有意差はパラメータ間の差の検定によるもので、絶対値で「1.96」以上であればパス係数の差が5%水準で有意、絶対値で「2.33」以上であれば1%水準で有意、絶対値で「2.58」以上であれば0.1%水準で有意である。

2) オ：オーバーツーリズムへの評価、ブ：インバウンド観光プラス効果への評価、異：異文化受容意識、地：地域愛着、生：生活現状満足、訪：訪日客歓迎意識。

3) *p<.05, **p<.01, ***p<.001

4. 考察

本研究では、先行研究を踏まえて訪日客歓迎意識の規定要因とオーバーツーリズムの潜在的影響を明らかにするために、構築したモデル図について、共分散構造分析と、調査対象の属性別の多母集団同時分析による構造の違いについての分析を行った (Fig.3)。以降では、分析結果に基づき規定要因と潜在的影響について考察を行う。

4.1 インバウンド観光プラス効果の評価が他の規定要因に与える影響

Fig.3 から、「インバウンド観光プラス効果への評価」が「訪日客歓迎意識」に対して、直接的に正の影響を与えていた。これは、インバウンド観光の経済的効果、文化的効果、環境的効果等への評価が高ければ高いほど、訪日客に対する歓迎意識が強くなることを意味し、佐々木の「地域住民がツーリズムのインパクトを知覚し、態

度を形成している」⁶⁾ という主張とも一致している。この結果より、訪日客の受入態勢を改善するために、地域住民に対して、訪日客の到来による収入の一部を公共サービスの改善等を通じて反映し、出来る限り多くの地域住民が受益者として、インバウンド観光をポジティブに評価できるようにする必要があると考えられる。地域にとって、訪日客の持続可能な受入態勢を構築する際に、インバウンド観光のプラス効果をいかに地域住民に評価させ、如何に地域住民の異文化受容意識を高めるかは長期に亘る課題である。地域全体の観光収入の用途の可視化や、地域に住む外国人住民、留学生を絡んで異文化教育活動の実施などは、課題解決の具体例だと考えられる。

一方、インバウンド観光のプラス効果への評価が低ければ低いほど、訪日客に対する歓迎意識が弱くなり、インバウンド観光の誘致と受入を実施する意欲が下がる可能性があり、持続可能なインバウンド観光の誘致、受入と推進に影響を及ぼす恐れがあると考えられる。

また、「インバウンド観光プラス効果への評価」が「異文化受容意識」に対して、直接的に正の影響を与えていた (Fig.3)。地域住民はインバウンド観光のプラス面の効果に対して高く評価すればするほど、異文化を受容しようとする。具体的には、地域住民は、インバウンド観光の推進により地元の経済、居住環境の公共施設が改善され、地域の伝統文化の価値を再認識できることを評価し、異文化の象徴である訪日客に対して好印象を持つようになり、異文化を受容しようとするようになったと考えられる。安達の「滞在者や外国人労働者が増加する背景において、ホスト社会側に相互理解への努力がなされて然るべきだ⁹⁾」という指摘から、地域住民の異文化受容意識を高めるインバウンド観光の推進は地域における多文化共生社会への構築に向けて、意義深いものだと考えられた。

その他に、「インバウンド観光プラス効果への評価」が「地域愛着」、「生活現状満足」に対して、直接的な正の影響を与える (Fig.3) ことから、日常生活においてインバウンド観光の経済的効果などへの評価が高ければ高いほど、住民の地域愛着と生活現状に対する満足度が向上することが推察された。

一方、「オーバーツーリズムへの評価」が「地域愛着」と「生活現状満足」に対して、直接的な影響を与えるという仮説が支持されなかったが、「インバウンド観光プラス効果への評価」を経由して、間接的な影響を与えていた (Fig.3)。「インバウンド観光プラス効果への評価」と負の相関があることによって、「オーバーツーリズムへの評価」が悪ければ悪いほど経済的効果等への評価が下がり、間接的に地域愛着と生活現状満足度が低下すると考

えられる。

更に、「オーバーツーリズムに対する評価」が「インバウンド観光プラス効果への評価」を通じて、「訪日客歓迎意識」と「異文化受容意識」に負の影響を与えていた（Fig.3）。このことに加えて、「訪日客歓迎意識」、「異文化受容意識」、「地域愛着」、「生活現状満足度」の4つが低下していたが、これらはオーバーツーリズムが及ぼした潜在的影響によるものであると考えられる。オーバーツーリズムは表面的に地域住民の生活に影響（騒音、渋滞、私用地侵入等）を及ぼしているだけでなく、意識的な面において、訪日客への拒否、異文化への拒絶、地域への不安、生活現状への不満等にもつながると考えられる。オーバーツーリズムの問題が深刻になれば、地域住民の生活現状への満足度が下がり、地域に対する愛着が薄れる恐れがあると考えられる。

「インバウンド観光のプラス効果（経済的効果、環境的効果、社会的効果等）への評価」を向上させることで、「オーバーツーリズムへの評価」がそれほど悪くなくなるという結論が得られたが、持続可能なインバウンド観光を実現するためには、根本的にオーバーツーリズム等のマイナス面の影響をなくしていくことが求められる。そのための解決策として、訪日客に対し、旅行会社、宿泊施設の予約サイト、飲食店などを通じて、来訪前に、訪問時のマナーや注意点などへの学習の時間を設ける必要があると考えられる。

4.2 訪日客歓迎意識に影響を与える要因

「地域愛着」と「生活現状満足」から「訪日客歓迎意識」へのパスは有意に推定されず、竹橋、鈴木らの示唆から推定された仮説を検証できなかった。地域住民の「地域愛着」と「生活現状満足」は「訪日客歓迎意識」に影響を及ぼしていないと考えられる。その理由の一つは、殆どの地域住民は訪日客の受け入れに関心を持っていないと考えられる。白らは観光まちづくり活動への参加は観光業従事者の方が著しく、有志である住民の意識が観光の経済的側面へ集中してしまい、生活空間に対する一般住民の評価は必ずしも高まらなないと指摘している。もう一つの理由として、訪日客の到来が、現段階ではまだ地域住民の地域内活動や生活に影響を及ぼしていないことが推察された。仮説①への考察を通じて、「オーバーツーリズムへの評価」は、「地域愛着」と「生活現状満足」に対して直接な影響を与えることなく、「インバウンド観光プラス効果への評価」を通じて、間接的な影響を与えていたことから、現状では、オーバーツーリズムの影響はそれほど深刻な段階ではないと考えられる。

4.3 地域住民の異文化受容意識の影響

「異文化受容意識」が「訪日客歓迎意識」に対して、直接正の影響を与えていた。すなわち、地域住民の異文化受容意識が高ければ高いほど、訪日客への歓迎意識が強くなり、却って、異文化を拒否すればするほど、訪日客を歓迎しなくなる。このことから、海外旅行などの異文化接触経験や外国文化の学習により形成された地域住民の異文化受容意識が訪日客への歓迎意識の形成を左右すると考えられる。これより、行政やインバウンド観光の推進を実施する団体などが訪日客の誘致と受入を行う同時に、地域住民に対して異文化教育などに取り組む必要があると考えられる。塘の「異文化体験の量の多さ、環境の異文化度の高さが異文化受容態度の形成に影響を与える」¹¹⁾という指摘のように、地域に住む外国人住民や留学生などとの異文化交流活動を実施し、異文化受容意識を高めることを通じて、訪日客に対する意識が改善され、歓迎意識が高められることによって、受け入れ態勢の維持と拡大につながると考えられる。

4.4 属性別の異文化受容意識と訪日客歓迎意識

4.4.1 男女別

男女共同参画の視点に立ったインバウンド観光誘致・受入の推進を目指して、男女別に規定要因と潜在的影響を分析した。その結果、「オーバーツーリズムへの評価」と「インバウンド観光プラス効果への評価」との相関に関して、男性では有意であったが、女性では有意ではない、両グループには有意な差が見られた。つまり、「オーバーツーリズムへの評価」と「インバウンド観光プラス効果への評価」との間の負の相関関係は、男性の方でより強くみられると推察される。「オーバーツーリズムへの評価」が、「インバウンド観光プラス効果への評価」を通じて間接的に「訪日客歓迎意識」に負の影響を与えていることで、男性の方がより強い傾向となっていると考えられる。

4.4.2 年齢別

持続可能なインバウンド観光受入態勢を維持するために、年齢別に住民意識を把握する必要がある。69歳以下と70歳以上のグループ間で構造モデルを比較したところ、「インバウンド観光プラス効果への評価」から「生活現状満足」へのパス係数がいずれも有意であり、また、グループ間に有意な差異が確認された。69歳以下は70歳以上と比較して、「インバウンド観光プラス効果への評価」が「生活現状満足」に与える正の影響が強いことから、年齢が訪日客歓迎意識と「オーバーツーリズムへの評価」に及ぼす影響があることが推察された。

4.4.3 居住地域&職業別

観光エリアにおいて、観光関連産業と非観光関連産業に分けて、「異文化受容意識」が「訪日客歓迎意識」に与える影響を比較した結果、観光関連産業と非観光関連産業はいずれも有意に影響が確認され、更に、グループ間の差も有意であった。つまり、観光エリアにおいて、異文化受容意識を高めることによる訪日客歓迎意識の上昇に関して、観光関連産業に従事する住民の方の傾向が強いと推察される。しかし、一般的に観光エリアにおいて、観光関連産業従事者は非観光関連産業従事者より比率が低い（伊根町観光エリアの場合は34人対111人）ため、地域全体の訪日客歓迎意識を高めるためには、観光関連産業従事者の異文化受容意識を高い水準に維持するとともに、非観光関連産業従事者の異文化受容意識をも高めることも重視する必要があると考えられる。

4.4.4 その他の属性

Table 4 より、居住年数別、職業別、居住地域別に、それぞれのパス係数の差異をグループ間の差の検定により検討した結果、全てにおいて有意な差は確認されなかった。この結果より、居住年数、職業、居住地域が「訪日客歓迎意識」と「オーバーツーリズムへの評価」に影響を及ぼさないことが推察された。

以上より、地域住民の属性を考慮した訪日客歓迎意識向上のためには、以下のような方策が求められる。例えば、「オーバーツーリズムへの評価」による影響を最小限に抑えるように男性住民の意見をより重視する、観光関連産業従事者の異文化受容意識の醸成を中心に教育・交流等の取組を推進する同時に、非観光関連産業従事者への異文化教育等を普及する、などである。

4.5 訪日客歓迎意識に間接的に影響を与える要因

以上の 4.1～4.4 より、「訪日客歓迎意識」に直接的に影響を与えるのは「インバウンド観光プラス効果への評価」と「異文化受容意識」の2つであると考えられた。

一方、「オーバーツーリズムへの評価」が、「インバウンド観光プラス効果への評価」、「異文化受容意識」を経由して、「訪日客歓迎意識」に間接的に負の影響を与えていることが明らかになった。この結果から、地域住民は「オーバーツーリズムに対する評価」が悪ければ悪いほど、インバウンド観光の推進でもたらされた経済効果等への評価が低くなり、さらに異文化受容意識も弱められ、訪日客を歓迎しなくなることが予測された。一方で、「インバウンド観光プラス効果への評価」と「オーバーツーリズムへの評価」との間に負の相関があることから、イ

ンバウンド観光の経済的効果、環境的効果等に対する評価を高めれば、オーバーツーリズムに対する評価の低下を弱められることが推察される。

5. おわりに

本研究は、訪日客が増加している状況を背景として地域住民の意識に着目し、京都府伊根町において、全戸を対象としたアンケート調査を実施し、訪日客歓迎意識の規定要因とオーバーツーリズムの潜在的影響を分析した。

インバウンド観光の受入態勢の構築に向け、地域住民意識の把握の観点から訪日客歓迎意識の規定要因とオーバーツーリズムの潜在的影響を明らかにしたことは、持続可能な農山漁村地域のインバウンド観光の推進のために重要な意義があると考えられる。しかし、訪日客歓迎意識に影響を及ぼす「異文化受容意識」の形成要因への究明、「異文化受容意識」の上昇に効果を発揮する手段への検討等は今後の課題として挙げられる。

引用文献

- 1) 張明軍・星野敏 (2019): 訪日客の持続的受入における農家民宿群の役割と課題—石川県能登町「春蘭の里」を事例として—, 農林業問題研究, 55 (1), 54-62.
- 2) 中島正裕・千賀裕太郎・齋藤雪彦 (2001): 都市農村交流活動に対する住民の評価に関する研究, 農村計画論文集, 3, 25-30.
- 3) 宮崎耕輔・谷本圭志・森山昌幸 (2015): 観光客の過剰な流入による地域住民の外出控えに関する一考察, 農村計画学会誌, 34, 236-242.
- 4) 白りな・十代田朗・津々見崇 (2016): 住民と観光客の意識からみる住民参加による観光まちづくりの利点と課題, 日本都市計画学会都市計画論文集, 51 (3), 13-22.
- 5) 岩松文代 (1999): グリーンツーリズムの展開と集落組織 京都府美山町北集落を事例として, 森林応用研究, 8, 27-31.
- 6) 佐々木土師二 (2006): ツーリズムのインパクトと地域住民の態度—観光心理学で取り残された課題に関する文献の概観—, 関西大学社会学部紀要, 37 (3), 197-269.
- 7) 竹橋洋毅 (2011): 幸福感和環境配慮行動の関係性—JGSS-2008 による分析—, 日本版総合的社会調査共同研究拠点 研究論文集, 11, 143-154.
- 8) 鈴木春菜・藤井 聡 (2008): 地域愛着が地域への協力的行動に及ぼす影響に関する研究, 土木計画学研究論文集, 25, 357-362.
- 9) 安達理恵 (2008): 日本人の異文化受容態度にみられる傾向—一地方都市での年代別・国別態度調査より—, 名古屋外国語大学外国語学部紀要, 35, 153-173.
- 10) 渡部美穂子・金児暁嗣 (2004): 都市は人の心と社会を疲弊させるか?, 都市文化研究, 3, 97-117.
- 11) 塘利枝子 (1999): 「子どもの異文化受容 異文化共生を育むための態度形成」, ナカニシヤ出版.
- 12) 豊田秀樹 (2007): 「共分散構造分析 Amos 編」, 東京図書株式会社.
- 13) 京都府市町村共同統合型地図情報システム, 2019.5.21 確認. (2019.5.31 受理, 2019.9.10 採用)